

♪ 2020年度 **poco a poco** ♪

Nr. 14

2020年12月9日(水)

文責:プファイル・辰巳

Dezember-Monat des

Dunkels und Lichts...

闇と光の月～12月。夜の時間が一番長くなる冬至があり、その暗闇を照らすクリスマスの灯りがある月。例年ですとヴァイナハツマルクトから焼き栗や焼きりんご、レプクーヘンの匂いが漂い、マルクト小屋やもみの木を彩る灯りが輝いているはずの12月。



11月末の日曜

日が第1アドヴェントでした。その日はお天気もよかったので、Bad Homburgの街中がどんな風になっているのか気になって、ちょっとお散歩してみました。マルクトは出ていなくても、ゾロゾロとかなりの人出です。午後から照り始めたお日様の光に誘われたのか、たくさんの方々が散歩を楽しんでいます。ブレッツェル屋さん、クレー



プ屋さん、ワッフル屋さん、ケーキ屋さんなど、テイクアウトできるものを売っているお店も開いていました。クアハウス前の広場には、もみの木を中心としたすてきなクリスマスの飾りができており、夜にはイルミネーションが輝くようになっています。そしてその前には、立派なクリッペ(降誕場面を再現した馬小屋)も、ちゃんと建てられていました。

コロナ制限下のアドヴェントだからこそ、暗い気持ちにならないようにと工夫されているような気がして、ほっこりと心が温かくなりました。



音楽こぼれ話 <語源を探ろう③>

Da Capo ~ 曲のはじめにもどる ~ >

楽譜の最後の方によく出てくる記号 <Da Capo> はくり返し記号の仲間です。<D.C.>と省略されることが多く、「曲のはじめに戻りなさい」という意味があります。よく似たくり返し記号に<D.S.(ダル セーニョ)>がありますが、こちらは「セーニョまで戻りなさい」という意味ですので、混同しないようにしてください。

さて、「Da Capo」の語源ですが、実は前回の<a cappella>とも関係があります。どちらもイタリア語ですが、さらにその語源をたどっていくと昔ヨーロッパで用いられていたラテン語に行き着きます。それは「caput(頭)」という単語です。この言葉からイタリア語の「Capo(頭部)」という言葉が生まれ、<Da Capo(曲の頭から:つまりははじめに戻る)>という音楽記号になりました。同じく「caput」から「cappa(聖職者が着用するフード付きのマント)」という言葉が生まれ、さらに聖職者が働く場所としての「cappella(礼拝堂)」という言葉へと発展したそうです。

ちなみに「cappa」という言葉はポルトガル経由で日本にも伝えられ「雨合羽」という言葉が生まれたとされています。また英語の「Cap(帽子)」「Captain(船長)」「Capital(首都)」なども語源はラテン語の「caput」だということです。

ラテン語は今でも学術用語としてや教会内の典礼音楽の歌詞としては用いられますが、日常会話で使われることはありません。それでも「ラテン系」という言葉の通り、イタリア語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語などラテン語から派生した言語はたくさんあります。ラテン語を学ぶことによって、いろいろな言葉の語源や文法の成り立ちが分かってくるそうです。興味深いですね。

<Da Capo> という記号が出てくると、対になって同じ曲の中にもう一つ<Fine(フィーネ:ここで終わり)>という記号も出てきます。繰り返した後、曲の半ばで終わりになることが多いので、この<Fine>が必要になってくるわけです。楽譜によっては、<Da Capo al Fine(はじめに戻って、フィーネで終わる)>と丁寧に記されている場合もあります。「Fine(終わり)」は英語のfinish, finale, infinityやスペイン語のfinitoと語源が同じで、やはりラテン語の「finire(終わりにする)」から派生してきました。語源をたどり始めると、どんどんお話がふくらんでしまいますね。

